

山登りや研究のことなど



若 者

中 野 岳 仁*

Mountain climbing, research work, and so on

Key Words : Mountain climbing, Himaraya, India, Nanostructure physics

1. はじめに、言い訳とプロローグ

あまり深く考えずに執筆の御依頼を受けてしまいましたが、「若者」というコラム名に少々たじろいでいます。実際のところもうあまり若くないですし、そこで、本当に若かった頃の話やそれについて今になって思うことなどを取り留めもなく書かせて頂こうと思います。本誌の記事として相応しいのか、はなはだ不安ですが、ちょっと息抜き用の記事とすることでご容赦頂ければ幸いです。

私は兵庫県の人間ですけれども、高校卒業後は東北大学に入学しました。物理学が好きであったのと、昔からなぜか「極地」などに興味がありまして、南極観測隊員を多数輩出しているという部門がある理学部物理学科を選びました。またそれとは別に、両親の影響もあり、山登りにも興味がありました。かつて第3の極地とも呼ばれたヒマラヤにも行けるチャンスがあるとのことで、入学早々に山岳部の門をたたいた訳です。まだバブルの残り香がする頃で、わざわざ厳しい山登りなどする学生も少なく、部員は少なかったです。ですので、初めから「ヒマラヤに行きたい」などと偉そうなことを言う1年坊主は先輩方にずいぶん歓迎して頂いたのを覚えています。大学は今よりもかなりおらかな感じで、みんな（いや、これは言い過ぎで、少なくとも私の廻りの学生

は）あまり講義には出席しませんでした。山岳部という所はそれに何倍も輪を掛けた感じで、留年生の先輩がごろごろしていました。私もあつという間にその雰囲気になじみ、せっせとロッククライミングや冬山登山に明け暮れていました。四季の活動を一通り経験して2年生になると、もう頭の中には山しかなくて、年間山行日数が100日に達しました。よくあれだけ夢中になって頑張ったものです。そのような調子で3年生の時は主将も務めさせて頂きました（あまり優れた主将ではありませんでしたが）。さて、そのような生活をしていると学業が疎かになるのは言うまでもありません。3年生も終わりに差し掛かる頃になって、さて将来どうするかと考え出す訳です。我ながらのんきなものであきれます。かなり無理をすれば次の1年で単位をそろえて卒業することもできたのですが、何かやっつけ仕事事的になってしまうのがイヤだ、山でもまだやり残したことがある、本当にこのまま就職活動を開始するのか... 今考えると甘えたモラトリアム以外の何ものでもないのですが、とりあえず人より1年ゆっくりしてみることにしました。それで性懲りもなくまたせっせと山に登りました。そんな折、懇意にしていた学内の医学部山岳部（長嶮山の会と言います）が1年後にヒマラヤに登山隊を派遣するので隊員を募っていると言うではありませんか。迷うことなく手を挙げ、最年少の隊員として登山隊に参加させて頂きました。



*Takehito NAKANO

1973年2月生
東北大学大学院 理学研究科 物理学専攻 博士後期課程修了(2001年)
現在、大阪大学大学院 理学研究科物理学専攻 助教 博士(理学) ナノ構造物性物理学
TEL : 06-6850-5534
FAX : 06-6850-5376
E-mail : nakano@phys.sci.osaka-u.ac.jp

2. ヒマラヤへ

1995年4月初め、私は10名ほどの隊員の方々と夜桜の上野公園を歩いていました。明朝、成田を発ちインドへ向かうのです。みな、この1年間の登山準備の大変だったことを思い返し、いよいよ行くぞ

という気合いや期待と不安、なんとも言えない雰囲気漂っています。今ではヒマラヤでもメジャーな山域においては、パッケージツアーのような登山もあります。しかし、一般的に言ってヒマラヤ登山、それもあまり人が入っていない山域に行くのは大変な一大事業です。我々が目指すのはインド・シッキム州にあるシニオルチュウ峰 (6,887m) の頂です。さほど高くないし、未踏峰でもありません。しかし色々な意味でかなり魅力的な山です。まずはその美しい山容です (図1)。1899年にこの地を踏査したイギリス人、フレッシュフィールドが「世界一美しい山」として世界に紹介したことは有名です。初登頂はかなり早く、1936年にドイツのバウアー隊によってなされています。もう一つの大きな魅力は、その地域にあります。シッキムはもともと独立した王国で、インド、ネパール、チベット (中国)、ブータンに取り囲まれています。古来よりインド=チベット交易のメインルートであったようですが、対中国 (あるいは清朝)、対インド (あるいはイギリス) との政治的関係は複雑で、大戦後も印中戦争の最前線であったりと、難しい地域です。インドへの併合は1975年と比較的最近ですが、このような政治的理由により外国人が容易には足を踏み入れられなかった地域なのです。従って、これだけ美しく有名な山でありながら、我々以前には4度しか登られていませんでした。我々は世界第5登をめざすという訳です。

単に登ること以外の準備がそれこそ山のようにあります。山域全体がまだ軍のコントロール下に置かれているので特別な許可が必要で、インド政府との交渉が大変です。資金集めも必要です。全部で2,000万円以上を隊員の個人負担に加えてOBの方々や企業からの御寄付をいただき集めました。阪神大震災の直後にも拘らず、物資や食料を現物で寄付してくださいとところもあり、頭が下がりました。登山のタクティクスは計画の根幹です。気象状況の調査や、過去の登山隊の記録の調査、どこにいくつのキャンプを置くのか、突破が困難な箇所や危険な箇所の洗い出し、そこの突破に何日を見込むか、どのキャンプに何人の隊員を配置するか、どれだけの装備と食料が必要か、キャンプ間の物資運搬計画、非常時の対応策... これは本来解くことのできない多体問題です。各担当が情報を持ち寄り、どのような登

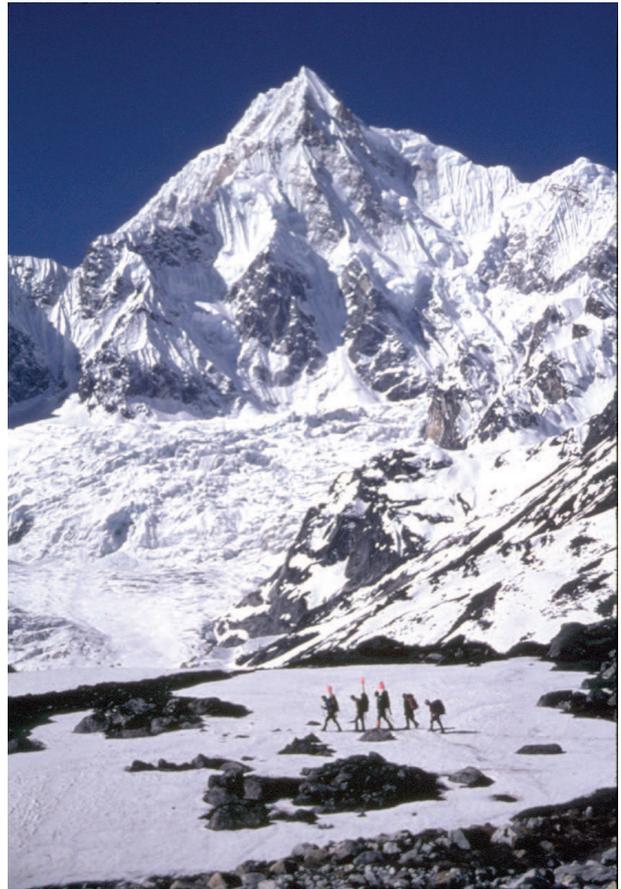


図1. インド・シッキムヒマラヤのゼム氷河から見たシニオルチュウ峰 (6,887m) と荷上に向かう隊員たち。前から2人目が著者。

山がしたいのかを加味して何度も議論します。ある程度計画が固まったら登山装備・食料・医療品などの調達と仕分け梱包という膨大な作業が待っています。全部で2トンほどの物資を準備しました。また、もちろんこの間に登山技術と体力の訓練も必要で、隊員で合宿登山もしました。という訳で、1年の準備期間などあつと言う間に過ぎて行きました。

私はそれまで海外旅行さえしたことがありませんでした。インドはなかなか刺激的な国です。勝手に私の荷物を運ぼうとする人や、物売り、物乞い、怪しい勧誘、嘘つきのタクシー等々。街に一步出るのにも気合いが必要でした。いちいち相手にしているところとちょっとした買い物などの目的が達せられません。でも皆さんしたたかに、たくましく生きておられるのだなと思うと、途中からは楽しくなりました。これは先輩からの受け売りですが、インドの魅力あるいは驚異は日本では排除されるような両極端が平然と共存しているところでしょう。無数の路上生活者

がいるかと思えば超大金持ちのマハラジャ（特権富裕階級）がいる。人工衛星や核ミサイルを作る科学技術力があるかと思えば、道路に「神聖なる」牛が寝そべっていて大渋滞が起きる。強烈に辛いカレーと猛烈に甘いチャイ等々。楽しいですし、色々と考えさせられ勉強になりました。しかし今思うと、あれを楽しむのには若さが必要かもしれません。

荷物の通関のトラブルや、ベースキャンプまでの荷運び人夫が確保できない問題、登山中は隊員が雪崩に巻き込まれたりクレバス（氷河の割れ目）に転落したりと、様々な困難がありましたが、2名のアタック隊員が頂上に達しました。残念ながら私は最終段階で高山病の症状が出て頂上まで行けませんでした。登山隊としては成功です。心から感動し、泣き、笑いました。そうして約40日間の登山活動を含めた2ヶ月のインド滞在を終え、6月上旬に帰国しました。

3. 研究の道へ、そして今思うことなど

実はインドに発つ直前に4年生として（5年目ですが）研究室に配属されていました。つまり先生方に無理を言って、いきなり2ヶ月の休暇を許して頂いた訳です。大学院への進学を希望しておりましたので、帰国直後から入試までの約2ヶ月、猛勉強致しました。なんとか遅れを取り戻せたようで、無事進学することが出来ました。あまり人がやってなさそうな新しい分野の研究がよいと思い、研究室を選びました。そして、ナノ構造体の新物質を自ら作り、その物性を調べるという研究に魅せられ、現在に至っております。

私は学部は理学部ではなくて山岳部卒業だと思っております。これはジョークではなくて事実です。実際、「仕事」のやりかたは登山から学びました。

既存の報告などの膨大なデータの調査、リスクマネジメント（登山では命に関わるので本気です）を含めた緻密な計画立案、成功率を高めるための訓練、計画の実施、報告書の作成。これは「仕事」以外の何ものでもないではありませんか。ただ、いわゆる「仕事」にならないのは生産性がないためです。探検時代はいざ知らず、現代において登山には客観的な価値がないためとも言えます。自分が満足するための活動なので、食べていくことはできない。登山を研究活動や人生になぞらえる方がいますが、実際は後者の方が遙かに厳しいでしょう。研究で命を落とすことはないにしても、自分が今登っている先に果たして頂上が存在するのかさえ、あるいは登っているのか下っているのかさえ分からなくなる。そんな中で何とか成果に結び付けていく。学術研究とはそのような姿なのだと思います。誰もが驚くような頂上を目指して、精進していかなければと思います。

しかしながら登山の魅力も捨てがたい。研究活動にはない要素として、身体的な快感が挙げられます。大自然の壮絶な景色に圧倒されながら氷雪壁にピッケルを振るう。多かれ少なかれ命の危険と表裏一体である快感は麻薬的かもしれません。今では守るものも増えてしまい、なかなか難しいですが、いつかまたあのときめきを取り戻してみたいという思いも否めませんね。こんなことを書くのは「危険」かな。

謝辞

執筆の機会を与えて下さいました下田正先生（大阪大学）、当時の私のわがままを快く許して頂いた寺崎治先生（現・ストックホルム大学および韓国科学技術院）、野末泰夫先生（現・大阪大学）に深く感謝申し上げます。また、東北大学山岳部・山の会、長峻山の会の皆様、そして両親にも感謝致します。

